

# 感情喚起刺激への注意従事・解放における バイアスと絶望感との関連

藤 井 崇 央

## 問題と目的

絶望感はうつ病の危険因子であるとされる。抑うつ症状を生起・維持させる要因の一つに注意バイアスがある。注意バイアスは従事段階と解放段階に区別可能であり、解放段階でより顕著に示される。本研究では①絶望感の程度が感情喚起刺激への注意従事と解放バイアスへ与える影響、②能動的注意バイアスと自動的注意解放バイアスに与える影響について検討した。

## 方 法

**予備調査** 実験課題で用いる画像・単語刺激の選定を目的として、大学院生14名に画像61枚と単語64語について感情値の評定を求めた。

**実 験** 実験参加者：本学大学生・大学院生39名（男15名，女24名；平均年齢22.08歳±4.59）  
用いた変数：①修正版ドット・プローブ課題の反応時間（ms），②修正版ギャップ・オーバーラップ課題の反応時間（ms），③絶望感尺度（the Hopelessness Scale）日本語版

## 結果と考察

研究1（絶望感高低群における注意従事・注意解放バイアスの検討）

バイアス指数(2)を従属変数とし、絶望感(2)×提示時間(2)を独立変数とする2要因混合計画の分散分析を実施した。その結果、従事段階・解放段階において主効果および交互作用は見られなかった。解放段階において有意差が見られなかった理由の1つとして、抑うつ者に注意バイアスが見られるのは単語刺激であり、表情刺激では見られない（Koster, De Raedit, Goeleven, Frank, & Crombez, 2005）ことが考えられた。

研究2（絶望感高低群における自動的な注意解放と能動的な注意解放バイアスの検討）

1. 反応時間を従属変数とし、絶望感(2)×条件(3)×感情値(3)の3要因の分散分析を実施した。その結果、絶望感低群は絶望感高群に比べて中性語からの能動的な注意解放が遅延することが示された。2. 中性語に対する反応時間をベースラインとし、絶望感(2)×感情値(3)の2要因混合計画の分散分析を実施した。その結果、絶望感高群は絶望感低群に比べて喜び語・悲しみ語からの自動的・能動的な注意解放がともに困難であることが示された。3. 中性語のギャップ効果得点をベースラインとして、喜び語のギャップ効果得点・悲しみ語のギャップ効果得点を従属変数とし、絶望感×感情値の2要因混合計画の分散分析を実施した。

その結果、絶望感高群は絶望感低群よりも喜び語から能動的に注意を解放することが、自動的な注意解放と比較して困難であることが示された。絶望感高群が、悲しみ語だけでなく喜び語からの注意解放にも困難を示した理由の1つとして、情動的な言葉の意味処理に比較的時間がかかることが考えられた（Ortigue et al., 2004）。